

## 薬学会の125年の歴史と将来

### 125 Years of the Pharmaceutical Society of Japan: History and Future

平成 17 年度会頭 杉浦 幸雄

President for 2005 Yukio Sugiura

日本薬学会は1880年（明治13年）4月24日、30名の会員によって発足し、以来125年、今日に至るまで着実な歩み続け、現在、約2万人の世界最大数の薬学研究者を擁する学会となっている（図参照）。黎明期の日本薬学会は柴田承桂・長井長義両先生によって指導を受け、1887年日本薬学会初代会頭に就任した長井長義先生は、その就任演説において、1. 薬品の吸収され易い形態への転換、2. 草根木皮の有効成分の検明、3. 化学合成による製薬と創薬、という薬学研究における3つの指導原理を示した。この時以来、日本の薬学研究は、このガイドラインに沿って進んできた。20世紀初頭の薬学研究は製薬へ大きく傾斜し、これに伴って天然物有機化学が隆盛をきわめ、日本の薬学は日本の有機化学とまで言われるようになった。第2次大戦後、日本の薬学教育は薬化学、薬理学、生化学、物理化学等を積極的に取り入れ、めざましい成果を挙げ、今や日本の薬学研究の生物学領域は有機化学と並んで国際的にも高い評価を受けている。実際、1969年（昭和39年）日本薬学会から薬学研究白書が公刊され、「薬学は医薬の創製・生産・管理を目標とし、これに向けて有機化学・物理化学・生物学を動員体系化したもの」と定義し、学会・学術の先見性を示した。

このような薬学研究の優れた業績は、日本の製薬産業に大きく貢献し、また薬剤師活動の大きな支えとなってきた。薬剤師活動を支える薬学研究が、日本では世界に類のないほど、立派な業績を挙げてきたことは特筆に値する。日本の薬学は歴史的背景から、「薬をつかうサイエンス」よりも「薬をつくるサイエンス」に傾斜した独特の発展をとげてきたが、いよいよ薬学教育の大きな転換期を迎え、医療に貢献する質の高い薬剤師の育成を目指した薬学6年制と創薬への人材確保・育成を期待した薬学4年制の並立が始まろうとしている。今後の課題は大きい、医療薬学と創薬科学とを車の両輪として共に発展させる必要があり、薬学研究者は手を取り合って価値ある変革を成し遂げねばならない。21世紀になって、科学の発展が益々、加速されてゆく中で将来の大きな流れの方向を見失うことなく、これからの薬学教育・研究の進路をしっかりと考えねばならない。

